

義経信濃より市谷義仲 義兵を率ゝ不日京都へ
攻登りしに、さうこれに法皇上人は驚き軍伴定あり
其節衛攻を公卿より召し田原を招き、此節の仇討
め何と仰られしを以て御免へしと申上りそれより家
人をも召寄軍伴定をせしむるに、聖供以人殺しとて
如何せんといふれども、紀伊大教坊進出て申す、未だ
法人殺さば人の子なりやと、ずから信濃の由を解き、
心を合はせられ給ふべくは、市谷殿の所由は我々衆人の所
む信濃へ来りてしより、衛攻をせしを以てなり、是年
の冬も御免へしと一変す大教坊より、信濃へ馳り

本尊殿一ツノ信濃公仁科の邑小名にて杉本を常勢乃
 乃を賴ミヤ入ノ本尊殿見テ小集リ法教をて大教
 坊を子也所迄——ル歟

治承三年通正のり大和必芳野郡に降く隠じ居る
 法皇を傳へて本曾と心を合せたりと京都へ
 押あへんとの少佐実正あり延安邊攻めり重芳惡七
 別當と宗清と大將とて其勢七百金部大和路に
 押あへは由尾歸るすへれど衡父を公作するに微勢
 を以て敵の大勢を信ず事難しといふは故の如に
 をす下軍もせざる所行んた又云甲斐より敵あせむ